

海 (かいし) 市 No. 27

● 詩

- 02 前田 勉 未明 (2)
06 横山 仁 生活の柄 (21)

● エッセイ

- 10 細部俊作 「華氏 451 度」感想
14 佐藤ただし 水田とツバメ (25)
17 横山 仁 雑記 (27)

未明
(2)

前田 勉

目覚めてしまった未明
深く

夢を紡いでいた時間が

何事もなかったかのように剝がれてゆく

揺らめいていたものは

寝返りするたびに

その反対側から後追いしていた

畳紙たたしに沁み込んでしまった

記憶

の

ほころびほつれるさまを

意味もなく

ただ

見ていたいと思っていた

そう

そう

淡い紫紺色の紬つむぎ

の

織り目に挟まっているかも知れない

遠い時間

畳紙に滲み出てくる

だれかの記憶のようなものを

ただ

意味もなく

きりきりと冷える空間の奥で

深く

夢を紡いでいたものが
後追いしてゆく

生活の柄(21)

—断片—

横
山
仁

死は ひとをやさしくする

*

遺影のなかで にこやかな老母は
なにかから 解きはなたれたのだろう

*

道元さんのお弟子さんと
親鸞さんのお弟子さんに
見送られた

*

「ただいま 戻りました^{*1}」
戻るからだは もうないのだ

*

深夜 いつものように
テレビのスイッチを切り
深い空へ 出かけたのだろう

*

その日^{*2}

デイサービスから戻れば
じゅんかん毛布と
マスカハニー・キャンデイが
待っているはずだった

* 1 週5日、4時30分ごろ、帰宅していた。

* 2 医師の「死体検案書」では「2月1

日 午後11時頃推定」となっているが、

午後11時にはまだ生きていたし、異変

に気づいたのは翌朝なので、2月2日

早朝に亡くなったものだとおもってい

る。

「華氏451度」感想

細部 俊作

レイ・ブラッドベリ著 一九五三年刊

(伊藤典夫訳二〇一四年発行ハヤカワ文庫SF)

本をもつこと、読むことが厳しく禁止されている近未来のアメリカ社会を描いたSF小説。

この小説で描かれているのは、本をもつていければ密告され、すぐさま消防士ならぬ「昇火士」が出勤して本を燃やす、所持者は拘束され、邪魔しようものなら家もろとも焼かれるという社会である。

そもそも多くの人々がいつの間にか本を読むのをやめてしまった。人々は、自宅のリビングで「壁面テレビ」(人々はテレビを「家族」と呼び、画面からアナウン

サーはその家の視聴者の名前を呼びかけてくる。)を見たり、耳につけた巻貝型のイヤホンでラジオを聞く。人々はおしゃべりして人と交友することや森を歩いたり蝶などの自然に関心をもつこともなくなつた。学校の授業では教師からの一方通行の話ばかりで、スポーツの時間が多い。なかでも団体精神を育むためチームスポーツが推奨される。子供たちの心は荒んでいて、子供同士の殴り合いや殺し合いが起きるのも珍しくない。

テレビもラジオも、人々が人間や世の中に疑問をもつ、調べる、考える、想像するなどに向かないように政府が仕組んだ娯楽装置になつてることがうかがわれる。また、人の感情を動かすものは遠ざけるべきだとされている。新聞はすでに消滅し、人々は監視されたなかで一様な暮らしを受入れ、平等であることが幸福だと思ひ込まれている。どこかの国と戦争が始まろうとしているが、具体的なことは人々には知らされない、そんな社会だった。

*

物語の主人公は「昇火士」の一員として本を燃やし

てきたが、いっぷう変わった少女と話したことをきっ
かけに仕事に疑問をもつようになった。また、本の魅
力を知りたくなって自宅に隠しもつようになった。そ
れが上司（班長）に発覚して逮捕されかけたが、班長
を殺し、本を数冊もつて町から逃走する。

川に身を潜めたり森や林を抜けていくうちに、自然
のなかに感覚が解放されていく快感を知る。かつて、
あの少女が話していた自然への親密な気持ちを感じる
ようになる。このあたりは上司の「昇火士」を殺した
ように、彼自身も「昇火士」から脱皮していく過程を
描いているようだ。また、妻と初めて出会った場所を
長い間思い出せないでいたが、逃走の途中でそれがシ
カゴだったと思いつく場面も、自分の人生を自分のも
のとして取り戻す過程として描いているようだ。自由
が抑圧された町で、人々が自然との素朴な交感や個人
として人とともに生きる実感からいかに離れていたか
をあらわしているようだ。

森の奥には彼と同様に逃げてきた人たちがいた。彼
らは聖書や賢人たちの著した本、哲学や文学書または
その断片を記憶し、暗誦し、それを聞きたい人に聞い

てもらおうことを自分の使命として、また、いつの日に
かそれを印刷することを夢みて、いわば草の根のよう
に国中に広がって行こうとしていた。折しも戦争が始
まり、数秒のうちに爆弾は落ち、主人公がそれまで暮
らしてきた町は一瞬にして燃え上がり、爆風が地上の
ものをなぎ倒し、炎はさらに勢いを増して広範囲に燃
え広がった。

*

自由と民主主義を標榜してきた国アメリカ。その国
が（小説のなかの端々から類推すると）第二次世界大
戦から一〇〇年以上後のいつ頃からか専制主義国家の
ような統治をしている―それがこの小説の設定のよう
だ。

読んでいるうちに、一昨年から中国で起きたこと、
テレビなどで見た香港のことを思い出していた。それ
まで一国二制度のもとで香港には特例的に民主制度が
認められてきたが、新たな法律の施行によって、「香
港独立」の旗を持つていたとして若者が逮捕されたり、
政府に批判的な新聞は休刊に追い込まれ、創業者たち
が逮捕されたりした。中国の人々の自由や人権は、以

前にもまして厳しい監視や規制の下におかれているようだ。そのことと、この小説の、政府の監視・統制下にある窮屈さに年月とともに馴らされてきた人々は、自分の中で重なっていた。そう思うと、この小説の舞台は近未来のアメリカというより、今となつては、むしろ今の中国かもなあと連想したのだった。

*

この小説が世に出たのは一九五三年というから第二次世界大戦が終結して一〇年余り後のことになる。今でこそインターネットで文書や写真、映像などの情報を世界中に流したり、パソコンの画面上で閲覧するのは普通のことだが、当時、そのような機器はまだ誕生しておらず、著者にもその発想はなかったことだろう。世界や地域の文化、歴史、哲学、思想などを著した媒体は紙などの可燃性のものであったから、時の権力者が、中身を知られると都合の悪いものを焼却処分したことは最も直接的で原初的な方法だった。

(紀元前の中国・秦の時代の焚書坑儒や第二次大戦時にナチス・ドイツがユダヤ人関連の本を焼却したことは広く知られている。ウィキペディアには、そのほ

か日本でも戦後GHQが書店や出版社、官公庁などにあった本や公文書を秘密裏に燃やしたと記されている。)

では、この小説にコンピューターやインターネットを登場させて人々を救えないものか、人々が政府に対抗するための武器にできないものかと空想してみた。しかし、強権の専制国家は、家庭のコンピューターを没収したり焼却処分してしまえばいいわけで、物語の大筋が変わるものではない。それに現代の専制国家がしているように、政府にとって邪魔なサイトは閉鎖したり、通信を遮断したりという方法もある。これにどう対抗せようか。人々の側に立つ影のハッカー集団に政府の情報システムを攪乱させようか。そんな稚拙な妄想をめぐらしていると、近未来といっても、部分的にはかなり現代に追いつかれたり、追いつ越されていて、かつ暗いよなあとという気がしてくる。そして、そもそも近未来の(この小説の)アメリカの人々はどうやって自由と民主主義を失ったのだろう、とか、現代のアメリカはその種を育てているのだろうか、とか、日本の近未来はどんな姿をしているだろうか、といっ

た思いに誘われていた。

専制国家の情報統制や強固な監視体制、強大な警察権力の下で、人々が人間性を失っていき、そこから際限もなく抜け出せないような社会をディストピアというのかもしれない。ただ、強固なトンネルの壁もどこかに亀裂が生じれば、そこから漏れ出る水はやがて壁をも崩壊させる。そんなふうには、記憶した一冊の本または本の断片となつて、人々の前で暗誦して聞いてもらう旅をし、広がって行こうとしている主人公たちは、その水と同じように力を蓄えていくのだろうか。

*

・主人公の友人が言った言葉が印象に残つた。

「細部を語れ。生き生きとした細部を。すぐれた作家はいくたびも命にふれる」

・小説の中に「(主人公の国が)二〇二二年以降、二度、核戦争を起こした」とあつた。ん、今年のことでないか、レイ・ブラッドベリさん、そんなこと、ありか？

水田とツバメ (二五)

佐藤ただし

・犀の角のように

家の一階の居間で父がストーブのそばで、車椅子に座り眠っている。鼻の下のチューブから酸素を送り、夢を見ているのか、ただ眠っているのか。身体はここにあるが意識はここにはなく、どこかへ行っているようにも見える。時々薄目を開けて辺りを伺うがまた目を閉じてしまう。最近はこうして一日の殆どを眠っているようになってきた。短く刈った頭髮もすっかり白髪になり、手の指も細く、静脈が浮いている。もうすぐ命の灯が消えようとしているのか、それともこうした状態が長く続いてゆくのか。

近くで母が時々声を掛けるが応答しない。日中は寝

ていて、夜は布団の中で「ウーウー」と低い声を出しているの、そばにいとこつちが寝られなくなるとこぼしている。

昭和八年生まれの父は今年で八九才になる。七人姉弟の長男として、早くから家の仕事をしていたよう、中学校には二日しか行かなかったと言っていた。

私の家は一六〇アールの田んぼと約二〇アールの畑を耕作していたが、その他に近くを流れる雄物川で地引網漁をしていたため、父は子供の頃から船の櫓の漕ぎ方を教わり、朝寝していると餌玉を一個口に入れられて連れていかれたという。春から秋にかけて鱒や鮭を捕って暮らしていたため、学校へ行く暇もなかったのだろう。

漁場は岩見川と雄物川が合流する辺りで、船の後ろで櫓を操作しながら魚が網にかかりそうな場所を狙って船を回し、網を落としてゆく。夜間に漁をする時も、カンテラの明かりを灯さずに向こう岸すれすれまで船を近づけることができた。

この地引網漁は昭和四〇年代まで続いていたが、下

流で操業していた工場の廃液などが影響したのか、次第に魚が取れなくなり、さらに、鮭の養殖もおこなわなければならなくなり、止めたようだ。

また、当時は農耕馬を飼っていたが、冬期間、父は馬を連れて山の木を引き出す仕事をするため、秋田市郊外の上新城や下浜の名ヶ沢などに行き、民家に泊まり込み、春まで杉の木などを馬糞に乗せて運んでいた。

馬は家では大切にされ、祖父に言わせれば長男の次に家で大切なのが馬で、その後には次男や三男が来ると言っていた。エサとなるフスマという小麦の糠を、干し草と混ぜて与え、草も農耕馬として力が出る草を刈って食べさせ、力が出ない田んぼの畦畔の草は与えなかったという。

こうした牛馬を農耕や運搬に使う時代も次第にトラクターやトラックに切り替わり、私の家も昭和四〇年代の初めに茅葺屋根の家を建て直した時、それまで家の中で飼っていた馬を数年後に手放した。そして耕運機を買って田畑の作業を行うようになった。

秋田国体が行われた昭和三六年頃、この村の人たちも外に働きに出るようになり、父も隣村の知人に頼ま

れ、電気の工事会社に行くようになった。それまで電気のこととは全く知らなかったが、社会が大きく動き出し、人手が足りなかったのか、車の免許も取り、ダクトサンのトラックを買って仕事に行き、雨の日は私を五キロほど離れた駅まで送ってくれたりした。田畑のほうは、田植えや稲刈の忙しいときは会社を休み、普段は祖父母と母が主に行っていたようだ。

当時は世間並の暮らしをするために四六時中働いていたようだ。秋の農繁期は、日中、家の仕事をし、夜は近くにある農協の倉庫に米俵を担ぐ仕事に行き、米を担いで倉庫の中に渡した、幅三〇センチの歩み板を歩いて米を積んでいたという。当時は一度に六〇キロの米俵を二俵担いで行くこともあったと言っていた。

昭和六〇年代になり、働いていた会社が親会社の撤退による影響で解散してからはボイラーの資格を取って近くの浄水場に泊まりの仕事で勤め、七〇才まで働いた。その後は主に家の田畑を作っていた。

これまで殆ど病氣らしい病氣をしたことが無かった父だが、八〇才の時、肺炎を起こして救急車で病院に運ばれた。若い頃からタバコを吸っていたのが災いし、

肺の機能が半分以下になっていると医師から言われ、ベッドの中で酸素吸入のマスクをしながら苦しうに呼吸をしていた。一時は命が危ぶまれ近親の者に知らせたほうが良いと言われたが、たまたま家に帰ってきた孫たちの顔を見て症状が良くなった。医師は家族の持つ力に驚いていた。

夏から秋にかけてヒエ取りの頃になると、腰の高さまで伸びたイネの中を歩いている父の姿を思いだす。広い田んぼでひとりヒエを取っていた。家族皆がそれぞれ忙しく働いていたのでヒエを取るのは自分の仕事と割り切ってやっていたのかも知れないが、自分の為すべきことを黙々とやっているその姿は、大げさだが「犀の角のようにただ独り歩め」と語ったブツダのこゝばを思い出させる。

父は三〇代で建てた家に今も住んでいる。家の山の本を伐り建てた家だ。また、一〇年代前に墓も新しくし、死後の準備もできている。この年代の農家に生まれた長男は、家と土地（田畑）と墓を守り、次の世代

に引き継ぐことが為すべきことと言われているが、それを実行してきたことになる。今は自分で起き上がることもやつとで、米俵を二俵担いだことなど想像も出来ない姿になったが、為すべきことを為すために力を使い切ったとも言える。

私も田んぼを作るようになったが、これまで田を作れとか、畑を手伝えと言われたこともなく、自由にさせてもらっていた。そのせいか、あまり田んぼの話をしたことは無かったが、ひとり犀の角のように歩み、為すべきことを為すことが一つの教えのように今は思っている。

雑記 (27)

横山 仁

かつて、朴槿恵（パク・クネ）元大統領が
こういう発言をしております。

戦前の韓国統治時代に、
日本にひどいことをされたということで、
韓国はひたすら日本を責め立てていますが、

実は、私たち日本人からすると、
「被害者と加害者の立場は変わらない」
という言葉を言葉をそっくりそのまま
韓国人に返したいぐらいです。

なぜなら、
約750年前、日本人は、
朝鮮人にあまりにも残虐な仕打ちを受けているからで
す。

「経営科学出版『国際情報アライズ』事務所」から、
宇山卓栄氏の新講座「知られざる古代・日中韓文明史
民族・宗教・文明から読み解く東アジアの興亡」の
案内メールが届いた。(20220224) 元寇の時のことが
紹介されていて、元（モンゴル）・朝鮮連合軍が日本
に対してどんなことをしたのかというものだった。
(20220224) 元寇といっても、朝鮮兵が多数を占めて
いたとは、きいたことがあったが。

(引用開始)

「被害者と加害者の立場は
1,000年経っても変わらない」

朝鮮の国書である『高麗史』によると、

朝鮮兵は、日本に上陸し、

女や子どもたちを連行し、

彼女らの手のひらに穴を空けて、

そこに綱を通して数珠つなぎをして

奴隷民として朝鮮半島に連行していました。

また、町を焼き払い、

山に逃れた日本人をしつこく追い回し、

赤ん坊の泣き声などをたよりに

見つけ出して殺すという

卑劣極まりない行為を行なっていたのです。

朝鮮人が自らつくった史料に

そう書いてあるのですから、

これは間違いない史実と言えるでしょう。

被害者と加害者の立場は変わらないのであれば、

韓国、韓国政府はこれを

どういふふうにも補償してくれるのでしょうか。

しかし、日本の教科書では、

この朝鮮人による日本侵攻について、

全くと言っていいほど書かれていません。

完全になかったこととして、

歴史の闇に封印されているのです。

そのため、我々日本人は、

戦後の反日教育により自虐意識を植え付けられ、

韓国に頭が上がらない

という状況が続いてしまっています ...

(引用終わり)

(引用開始)

1272年、「日本を懲らしめる必要がある」と述べて、

朝鮮王である忠烈王は、日本に対して、内臓が震える

ほどの烈しい怒りを感じていた。それは、「日本が元(モ

ンゴル)の属国になることを拒否していたこと」に対

して腹を立てていたのである。

(中略)

そのため忠烈王は、強者であるモンゴルに擦り寄って、日本の悪口を散々説き、日本に攻め入るように嘆願していたのだった。

彼は、日本征伐のために率先して、約3万人の朝鮮人に強制労働を強いて、900隻の船を造らせており、また彼は約1万～1万五千人の朝鮮人兵士・水夫を動員していた。(引用終わり)

名著といわれる網野善彦著『蒙古襲来』に、こんなことがかかれていたのか、記憶にない。

*

ウクライナ情勢に関しては、及川幸久氏のYOUTUBEが、いろんな情報を調べてあげているので、参考になる。2/23「ロシアがウクライナ東部 ドンバス2州独立承認 プーチンの真意とは」、2/26「ウクライナの街は平然 ウクライナ軍兵士は投降 プー

チンは停戦交渉へ」、3/1「ウクライナ政府を乗っ取り ロシア系住民を襲う 極右ネオナチとは」

及川氏によれば、不利とわかっているのに、プーチンのこうした行動の背景には、ミンスク合意不履行があるらしいし、またネオナチによるロシア系住民への虐殺も。

プーチンが強欲な、国際金融資本家・戦争屋と関わっていることは、知られているが、今回もそれがあるようだ。

西田昌司氏が3月1日配信した「なぜロシアはウクライナ侵攻を強行したのか？その背景に国際金融資本とロシアの攻防が見えてくる」(西田昌司の政策議論「西田ビジョン」【週刊西田】)も興味深いし、配下のワスゴミはさっそく2016年3月のSNSの投稿写真を、2月25日「現在のウクライナ」としたフエイクニュースを流している。(3月1日のはぐらめい氏「移ろうままに2」で紹介している、田中宇氏の「ウクライナの現状と今後」より)

あとがき

◆ぎばさを買いに老いた母と一緒にスーパーに行った。背中を丸めトレイに入ったぎばさのラップを押しながら、しきりに中身を吟味している。そばで黒いコートの若い女性が、どれが良いのかと聞いているようで、「南蛮」と呼んでいるぷっくりして先の尖ったものが葉の付け根にあるのが粘ると、講釈を始めた。買って帰ったぎばさは叩いて食べさせてくれた。確かによく粘りかつ旨かったが、あの長い講釈は彼女に有難かったのか、迷惑だったか。(T)

◆「海市」編集中に届いたのは、石川悟朗さんの「のんびりや」第43景。弟鍊治郎さんの死に触れ、長田弘の「花を持って、会いにゆく」に「少し救われた気がした」とかかっていた。小生のばあい、まだ老母の死が腑に落ちないでいる。(J)

◆先般久々に某図書館へ行ってきた。その折、今や秋田の殆どの書店や図書館でも並んでいない月刊詩書を見たのだが、バックナンバーを含めページを広げた跡が無い。書店の棚に無い（秋田市内某店だけには不定期だがある）のは当然のことかと納得。必要とする人がほほいさないか定期購読ということ？ 掲載されている詩も論評も値段も”お高い”し、私も買うことはないが。(B)

◆年明けとともに雪寄せに明け暮れた。内陸部に比べればまだマシか。でも、2月中旬までは雪ペラを使わない日はわずかだった。敷地内3カ所に堆積した雪の山がこれから日に日に低くなっていくはず。(S)

「海市」 第27号

2022年3月11日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方